



大分合同新聞社 那賀泰彦 著

私とスポーツ

闘将物語

松田瑞雄

【第六章】

大分商への

置き土産

初版発行／二〇〇九年五月一日

30 津久見に敗れ、2回戦で涙

好機をつぶし、相手に勢い

県高校野球界を引っ張ってきた大分商と津久見。選抜にアベック出場して以来、甲子園がかかった大会になると新興勢力に押されていまひとつパツとしない時期が続いていた。野球に限らず、スポーツは“横綱”が強く初めてレベルアップするし、人気もわいてくる。両雄のどちらが先に復活の甲子園に行くのか。ファンは注目していた。

このような状況の中で迎えた1977（昭和52）年の大分商は、前チームの流れをくんでけっこう強かった。新人戦の前年秋の県選手権では準々決勝で中津工を9―1で下し、準決勝で日田林工に2―3で敗れたものの4強入り。秋の九州地区大会県予選でも杵築、別府商を大差で倒してベスト8。まずまずの成績を残して新しい年を迎えた。

“事件”は春の九州地区大会県予選1回戦で起こった。大分商は別府球場で大分工と対戦したが、七回表を終わった時点で10―3と大量リード。ところが、これで気が緩んでしまい七回裏に4点を与えてコールドを逃し、九回裏に3点を奪われ、とうとう同点に持ち込まれた。

延長十回に3点を挙げてその裏の反撃を2点に抑え、13―12でやっと勝ったが、松田監督、山本忠夫部長（元大分商校長、元県高校野球連盟会長）らが黙っているわけがない。当時はどこの学校でも負けたり、内容が悪いと走らされることが多かつ

た。案の定、「学校まで走って帰れ」。主将だった外山保彦さん（トキハ婦人服部仕入れ担当）は「悔し涙で走った別大国道を通ると今でも当時の懐かしい思い出がよみがえり、部員の顔が浮かんできます」という。2回戦の白杵商にも勝った

が、準々決勝で鶴城に0―6で敗れてベスト8止まり。続く県選手権も初戦で鶴城に0―7（七回コールド）で敗れ、春のシーズンは不振のうちに終わった。しかし、一人の落後者も出さずに走って帰ったことでチームはまとまり、夏に向かって確かな歩みを始めた。

この年の大分商は久多良木光男投手がエース。1年生の秋から投げており、2年生の春には招待野球で東海大相模とも対戦。巨人の原辰徳監督と勝負して左前打と投手ライナー。将来はプロ野球も夢ではないと思われていた。久多良木さん（大分銀行荘園支店長代理）は「大分商創立60周年記念招待野球で広島商に完投勝ちしたのが印象的。原監督の投直は本当は胸に当たっ



勝てる感じはあったが…宿敵に悔しい敗戦

てグラブに入った。見ている方は直接、捕ったように思っ
て手がわいたが、胸が痛かった。原監督や4番の津末選手
の打球は球脚が違いました。入った当初はプロへの期待も
確かに大きかったが、地肩が弱くてあきらめた」という。

夏の大会は1回戦で大分を8―3で破り、2回戦の相手は宿敵・津久見。荒金英三三塁手、谷崎教明捕手らは津久見だけに絶対負けたくないと思った。2人とも兄が津久見のOB。荒金さん（後藤学園広報調査部副部長）は「津久見を倒そうとよく相談していた」という。

試合は大分商が再三のチャンス再三三塁走者のタッチアップ失敗やけん制アウトでつぶすうち、久多良木投手も津久見打線につかまって1―5で負けた。久多良木さんはぼうぜん自失。「球場を出るまで事態がのびのびと泣けなかった」そうだ。外山さんは「勝てる感じはあったが、好機をつぶして津久見ペースになった」と悔しそう。

荒金さんは「久多良木の調子が本物ではなかった。いけると思ったが、勝ち運がなかった」と振り返った。それでもみんな松田監督に教えてもらったことを最高の誇りにしている。荒金さんは県高野連軟式委員長をしていたことがあるが、ある時、松田監督から新大分球場のスタンドに呼び出されて「硬式でも軟式でも野球にかける球児の思いは同じ。しっかり運営をしなければ失礼だ」とひどくしかられたことがある。「野球に対する姿勢は一般の監督を超越していました」と思い出を話した。

62年に新採用されて以来16年。松田監督の第1期大分商での夏はこの年が最後となった。



選拔出場を置き土産にして転任するという夢はかなわなかった

31 見果てぬ夢の甲子園

「大商の松田」 名声が定着

第1期大分商で最後の年となった1977（昭和52）年度の2年生は秋の新チームから甲子園も夢ではない好チームに仕上がっていた。レギュラーの半分は1年生だったが、上級生と下級生がうまくマッチ、最高の強さを見せていた。松田監督も翌年の選抜に出場して最後のひと花を咲かそうと燃えていた。

新人戦の県選手権では初戦で日田林工にコールド負けして不安な滑り出しとなった。しかし、ここから大分商らしいしぶとさを発揮。選抜の第一関門となる秋の九州地区大会県予選では舞鶴、大分、鶴城と倒し、準決勝ではライバル日田林工を3―0でぼふった。決勝の相手は宿敵・津久見。試合は優勝戦にふさわしくいつも通りの白熱戦。津久見がリードすれば大分商が

追いつき、4―4のまま九回裏、津久見の攻撃を迎えた。大分商のマウンドを守るのは前田投手。一死を取ったもののヒット2本と四球で満塁のピンチ。ここまでなら「併殺で何とかしろ」ですむ。だが、ボールカウントはたちまち0―3となり、絶体絶命のがけつぷちに立たされた。許されるのは「ストライク」だけの状況の中で前田投手は奮起。見事にストライクを通して3番中津留選手、4番山口選手を打ち取り延長戦に持ち込んだ。まさに「守りの大分商」の本領発揮。紙一重のところで踏ん張ったが、津久見の故小嶋仁八郎監督も生前、「あの場面でよく連続してストライクを投げきったものだ」と精神力をたたえていた。

「ピンチの後のチャンス」。十回表、大分商は菅原選手の適時打に敵失などで一挙3点を挙げて決着。こうして九州地区大会の出場権を獲得したが、両雄の対決にふさわしい大熱戦。県春日浦球場がある「春日の森」には1球ごとに両校応援団の歓声と悲鳴が響きわたっていた。のちに主将となる捕手の荻浩文さん（JR九州フードサービス総務課長）は「劇的。0―3になった時は祈るような気持ちでミットを構えていたが、いいコースにストライクがきた」と今も記憶は鮮明だ。

希望に胸ふくらませて臨んだ秋の九州地区大会は長崎で開かれたが、いい夢は見られなかった。当時の長崎市大橋球場で開かれた開会式の後、長崎県高野連手配の車で諫早球場に移動して長崎日大と初戦で対戦。だが、道路工事で移動にことのほか時間がかかり、球場に到着するやいなや試合となった。それだけなら条件は五分だが、相手チームはレギュラークラスを開会式に出席させず準備は万端だった。「弁当も食おうせんうちに

試合。開会式が遅れ、移動もものすごく時間がかかった。少し開始時間をさげるように頼んだが、だめだった。うちのミスは何もないのに」と当時の大分商関係者は今でもこの時の対応を残念がる。松田監督も「いつかこの敵は討ってやる」と心の中で誓っていた。

こんなことがあって、大分商は3点をリードしたもののどこか浮足立ったところがあり、延長十二回の末に5―6で負けた。荻さんは「その日のうちに帰りましたが、負けたショックは大きく大変でした」という。4番の菅原浩二さん（大分エル・エヌ・ジー業務部经理課）も「勝つつもりの相手だっただけに先生からものすごくしかられました」と悔しがった。

選抜の夢破れた大分商。春の九州地区大会は地元大分であった。県予選は松田監督のお別れ大会。後藤美次監督（現臼杵商監督）に引き継がれたが、ナインは最後の頑張りをみせて準優勝。第2代表として本大会に出場した。だが、初戦で豊見城（沖縄）にコールド負けを喫した。甲子園をかけた夏の大会も決勝まで進んだが、日田林工に3―4で敗れ、あこがれの甲子園に春も夏もあとひと息のところまで届かなかった。菅原さんは「体調をこわして立っているのが精いっぱいの状態。打順を下げてくださいとお願ひしたほど」だった。そして荻さんともども「松田監督に教えてもらった最後まであきらめない野球をやったが、甲子園には行けなかった。残念です」と振り返った。

松田監督の選拔出場を置き土産にして転任の夢はかなわなかった。だが、ここまで大分商に残した足跡は偉大なものがあり、「大商の松田」の名声はすっかり定着していた。



松田監督、大商最後のノックをする



当時1年の岡崎の才能を見いだした松田監督

32 44年ぶりの春夏制覇

岡崎を抜てき 偉業に道

県立高校の教員には同一地区16年というルールがあり、転任は宿命でもある。1962（昭和37）年に大分商に新採用され、故志手清彦監督の後を継いで古豪の監督に就任。全力を尽くしてきたが、とうとう転任の時期がきた。77年を最後に惜しまれつつ竹田に移ったが、大きな「お土産」を残しての異動だった。最後の年となった77年に入学した1年生は、春からいきなりレギュラー（遊撃手兼投手）となった岡崎郁選手を筆頭に、1年生の秋から正選手となった松村直樹二塁手、古庄正彦三塁手、荒金八十八中堅手、窪田雄二遊撃手のほか、三野和利内野手、安部正外野手らも試合に出場。大きな可能性を秘めた楽しみなチームだった。

その期待に応えて順調に成長。3年生になった時、野球部史上に見事な足跡を残した。まず2年生の秋。選抜につながる九州地区大会県予選で高専、日田、大分工、国東を下して決勝に進出。最後は柳ヶ浦を5―2で

破って第一関門を突破。福岡で開かれた九州地区大会では、神宮大会優勝の柳川商（現柳川）を倒した鹿児島実と初戦の準々決勝で対戦。三回に一挙6点を奪う猛攻がきいて7―5で逃げ切った。大きなヤマ場を突破した大分商は準決勝でも都城（宮崎）と緊迫した展開となったが延長十一回の末、4―3で競り勝った。決勝で八代工（熊本）に敗れたが、待ちに待った“春の使者”は5年ぶりに大分商にやってきた。

選抜では作新学院（栃木）と1回戦で対戦。岡崎投手は9安打を打たれながら1点しか与えず、打線は8安打で効率よく5点を奪って快勝。2回戦では高橋義晴捕手の本塁打などで6点を取ったが、地元の東洋大姫路（兵庫）に12点を奪われて敗れた。

当時、県内では春夏連続甲子園出場は至難の業。選抜で優勝した津久見でさえも夏は大分商に敗退。はるか戦前の35（昭和10）年に大分商がたった一度だけ偉業を成し遂げていた。

夏はこのジंकウスに挑戦。1回戦から別大付（現明豊）、杵築、日田、中津北と下して決勝に進出。別府商と大熱戦を繰り広げたが、2年生左腕松本健投手、4番佐藤理左翼手の力もあつて5―4の1点差で逃げ切り、春夏連続出場を決めた。大分商の大先輩たち以来、実に44年ぶりの快挙。指揮を執ったのは前年春、松田監督からバトンを受け継いだ後藤美次監督（現臼杵商監督）だった。

甲子園でもしたたかだった。“省エネ打線”といわれながら弘前実、佐賀商、日大山形を倒してベスト8に進出。準々決勝でも横浜商を相手に熱闘を展開。敗れはしたが、見事な戦いぶりを披露した。



第 63 回九州高校野球県予選 優勝した大商チーム。昭和 53 年 10 月

巨人の選手会長を務め、4番を打ったこともある岡崎さん（野球解説者、東京・炭火焼き香おるオーナー）は「中学時代は野球部に入っていなかった。もっぱら父と練習していた。大分商にはけっこう中学校で評判の選手が入ってきたが、その中で1年生として練習を始めた2日目に松田監督がきて上級生の練習に加わるようにいわれた。いい当たりが飛んで、3日目にはレギュラー打撃もした。これがすべての始まり。僕がいうのもおかしいんですが、選手を見る目はさすがと思いました」と、懐かしそうに振り返った。ちなみに岡崎さんがレギュラー打撃で対戦したのは県内ナンバーワン投手といわれていた久多良木光男投手（大分銀行荘園支店長代理）。松田監督は「とにかくうまくいった。1年生を使うには上級生を納得させなければならぬが、岡崎はみんなの前で攻守とも見事にそれを証明した」と話した。

古庄さん（前トキハ勤務）も高校に入って松田監督から左打ちにかえられた一人。「投手を“グビ”になって野手に転向。俊足をかわれて左打ちになったが、最初はきつかった。セントーから左にしか飛ばんし、内角球は捕手の方にしかよけられなかった。後ろによけらんでずいぶん痛い思いをしたが、左打ちになったのと岡崎がおったおかげで甲子園に行けた」と満足そう。日大山形戦で決勝の三塁打を放ったが、「あの当たりが最高でした」と笑顔をみせた。この大会の弘前実戦で岡崎さんが放った三塁打とともに痛烈な迫力はファンの記憶にしっかりと残っている。

松田監督は誇らしげに、2年前にまいた種の開花を見つめていた。

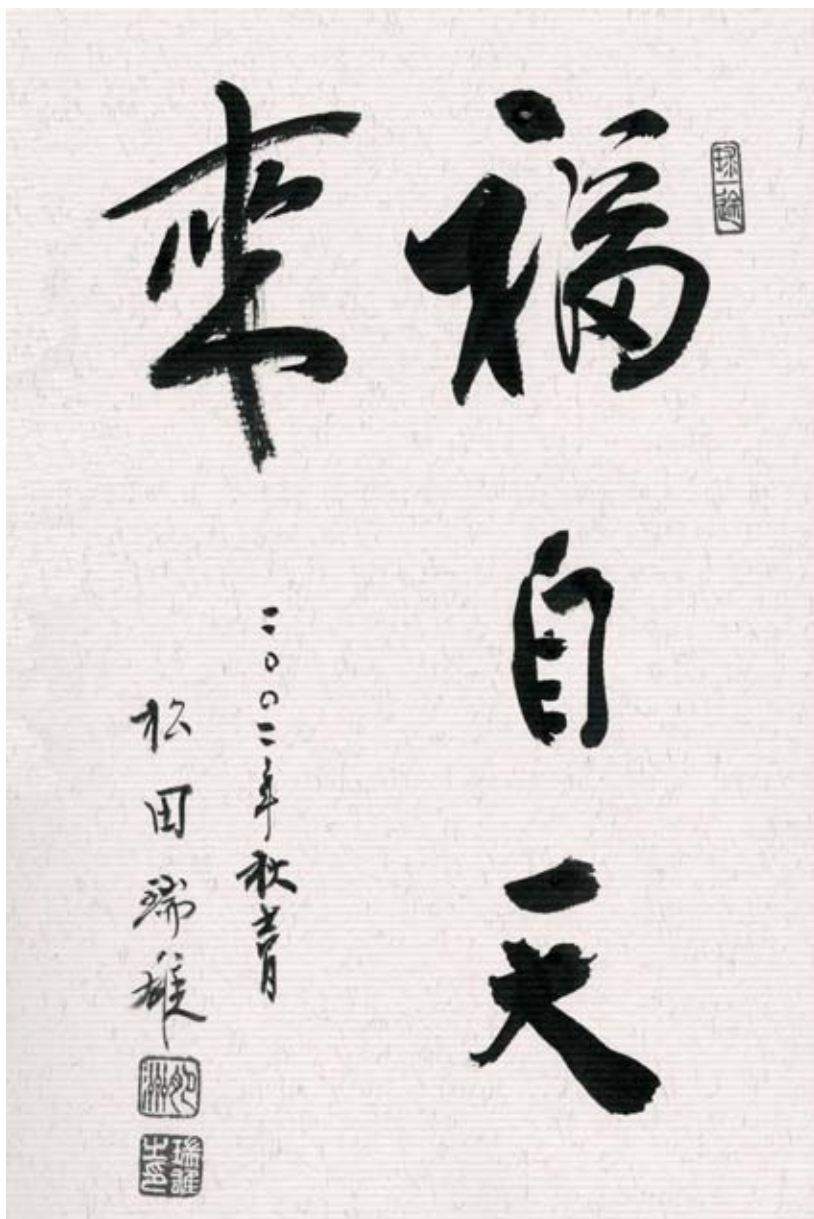
33 色紙

“松田野球”の精神を筆で

スポーツ関係者には達筆の人が驚くほど多い。折に触れ、色紙を書いたり、サインをしたりする関係だろうか。津久見の故小嶋仁八郎監督や松田監督が心を込めて書いた色紙は、「すみませんが私にも一枚いただませんか」と思わず頼みたくなるほど素晴らしいものだ。

以前、大分で公式戦やオープン戦をやっていた時、広島東洋カープの阿南準郎元監督（鶴城高出身）の丁寧な色紙にもほれぼれと見とれた記憶がある。

松田監督が本格的に書道を始めたのは大分商時代の昭和40年代半ば。職員室で席が隣同士だった書道の平田陽邨先生が年度



書道の授業のため睡眠時間を切り詰めお手本を書いた

途中に病気で休むようになった。松田監督が、かなりの「書き手」であることを知っていた当時の故高原三郎校長から平田先生の代わりに授業を受け持つように要請されたのがきっかけ。いささかの自信はあり、軽い気持ちで引き受けたのだが、やってみたらこれが意外に大変なことだった。

書道の時間は2時間連続で行うことが多い。最初はいき書のお手本を1枚書いてやっていたが、これだとほとんどの生徒は1時間もしないうちに書き上げ、あとの時間は遊んでしまうようになってしまった。

これではいかんと、「漢字」「俳句か短歌」「文学作品のさわりの部分」など3枚のお手本を書いて授業をするようにした。これだと2時間はたつぷりかかる。授業は松田監督の思い通りに進むようになった。

だが、教師という名がつけば「仕事」になる。そうになると教える方も大変だ。素人の趣味の範囲なら「うまいなあ。ちよつと書いてください」ですむが、授業となるとそうはいかない。野球の指導で寝るのはほとんど毎日のように午前さまだったが、書道の授業がある日は睡眠時間をきりつめて午前4時に起床。一心不乱に3枚のお手本を書いて備えていた。

「もう一人の先生と2人で週に6時間受け持ったが、いい勉強になりました。人に教えるとなると中途半端なことはできない」と、何事にも前向きに取り組む松田監督らしいコメント。そして「でも本格的に習ってないからやはり駄目ですね。自分の家の墓にも書いたが、専門家が書いたのとは勢いが違います」と謙そんした。

松田監督が卒業の時とかに色紙を書いて贈るようになったのはこのころから。最初は漢字一字の「和」「情」「夢」などが多かったが、その後は「福自天来」などの四字熟語なども書くようになった。また、締めくくりの夏の大会の前には「一球入魂」などの言葉も書いていた。

人生も野球も山あり谷ありだが、「松田野球」の精神的な教えを示す代表的なものとしてあげられるのが、「人の道は野球から学べ」というものだ。

誰でも周囲に「師匠」といえるような人がおり、少なからず影響を受けることが多いが、もともと松田監督が色紙を書くようになったのは「伯父・松田喜一」の存在が大きい。

大正から昭和にかけて熊本で「農民道場」などをやっており、農業関係者の間では「西の松田」といわれるほど有名な存在だった。麦わらを畝に敷き込んだり、酪農を取り入れたりして土壌改良などをやっていたが、この人の教えに「稲は稲から学べ」「土は土から学べ」というのがあったそうだ。

もちろん、松田監督風にアレンジして人の道と野球をひっつけたわけだが、ヒントは伯父の言葉だった。「難しく考えるのではなく、人生も野球も当たり前のことをやればいいわけですよ」と松田監督はいう。

このような松田監督の考え方は大分商OBらに強い影響力を及ぼしており、松田監督のやり方そのままの指導をした監督もいたほど。授業や人生の難所に立ったとき、「松田先生ならどうするだろうか」と考えて行動した教え子も数多くいたようだ。まさに監督みょうりに尽きるのではなからうか。

スポーツだけでなく芸術センスも抜群な松田監督

34 卒業式

証書、進行…一人で何役も

スポーツと芸術は相通じるものがあるのだろうか。松田監督は芸術的センスも相当なもので音楽などにも造けいが深い。父や兄、姉が音楽などの教師をしていた関係で子供のころからごく自然に楽器などに親しんできたことによるものだろう。「ほんの素人ですから難しいことはできない」と謙そんしながらも、ピアノは「割と弾きよった」という。このほかギター、三味線なども演奏。歌う方もかなりのものでコーラスもやっていた。

若いころからスポーツや文化に、あふれる才能を発揮していたが、これは多感な中学時代に野球の指導を受けた「蔵野恭敏」という人の影響があるように感じる。この人も多芸だったが、松田監督もまた野球以外に書道、音楽などの「芸術的センス」も抜群だった。それを示す面白いエピソードがある。

松田監督は大分商時代の
ある年、卒業式を一人で取



り仕切ったことがある。前回書いた通り、書道の授業を受け持っていたが、その「腕」をかわれて卒業証書の名前書きをした。オフシーズンとはいえ、間もなく始まる春の大会に備えて本来の野球の指導も忙しかったが、誠心誠意、卒業証書を仕上げた。そして会場にはる式次第などもしっかりと書いた。

当時、音楽は掛け持ちの先生が多く、いつも大分商にいろとは限らない。そこで専門ではないが、松田監督が音楽の先生の代理で校歌や君が代などの歌唱指導をした。こうして卒業式を迎えることになったが、音楽の先生は掛け持ちする2校の卒業式が重なってしまい、もう一つの学校に行ってしまった。それで大分商は松田監督がピアノを弾いて伴奏することになった。また、体育の教諭として卒業式の会場づくりも当然の「仕事」としてやった。これだけすればほとんど一人で卒業式を取り仕切ったといっているが、まだ終わらなかった。

卒業式当日の朝になって進行を担当することになっていた先生の歯がもげるというハプニングが起きてしまった。「空気が抜けてしつかりとしゃべることができん。せつかくの晴れの日」に学校、卒業生、父母らに迷惑をかけたらわるい。急にすまんことだが、あんたが進行をやちよくれ」と言ってきた。松田監督は「服も簡単なものしか着ていないし、ピアノも弾かなければならないので…」といったんは断った。

しかし、卒業式の始まる時間は刻々と迫っており、とうとう進行役を引き受けることになった。自分で書いた式次第通りに、マイクに向かって「校歌斉唱」などと告げ、急いでピアノの前に座って伴奏をしたが、すべて自分で準備してきたことだから

手順はわかっている。何の間違いもなく進行役をこなし、ピアノも上手に弾いて滞りなく大役を務め終えた。こうしてこの年の大分商は松田監督の獅子奮迅の活躍で無事に卒業式を終えたが、最後に残った会場の後片付けも当初から予定されていた仕事としてさりげなくすませた。「急に言われてまいりましたが、皆さんにご迷惑をかけずに終わったことがなにより。今となつてはいい思い出です」と懐かしそうに振り返った。

卒業式の後に開かれた恒例の教職員の慰労会。校長をはじめ、居並ぶ先輩教諭を差し置いて「主役」はもちろん大活躍した松田監督だった。「あんたがみんなやってしもうたなあ。うまいもんじゃった」と、次々に声がかかり、最後は大笑いになってめでたく幕となったそうだ。



久しぶりに大商グラウンドで指導する松田前監督



けつバットの名手？でもあった松田監督

35 けつバット

きずなが必要 “愛のむち”

大分商の練習は戦前からハードで知られていた。毎年、締めくくりの夏の大会に照準を定めてひたすら鍛え上げられていく。水の入ったバケツを置いての “千本ノック” や、自分一人で行くだけでもできる素振りなど、厳しい練習は当たり前。この結果、したたかなまでの粘りの大分商野球が生まれてくるといってもいい。しかし、大分商に限らず甲子園に出場するようなチームはどこも苦しさを乗り越えて明るい前途を切り開いたともいえる。

試合でも練習でもいつも勝ち、うまくいけば問題はない。し

かし、なかなか思い通りに進まないのが勝負事。少しでも勝率を上げ、上手になるようにするのが練習だが、ミスをすれば「気合」を入れられる。試合会場から走って帰ったり、試合中に立たされたり、座らされたりと「罰」はさまざま。「練習中に気の抜けたプレーが相次いで、座らされ、スパイクが尻に食い込んで痛かった。あれだけはたまらんかった」と、思い出を話す人もいる。

しかし、何といっても有名なのは「けつバット」。何かへまをやると文字通り尻をバットでたたかれるわけである。

野球をやった人ならおそらく尻にそつと手が行くのではないか。別名、「愛のむち」。指導者にとっては「いい選手に育てた」「本番で後悔しないように」などという願いを込めての叱責（しっせき）だが、「親の心子知らず」。選手にとってはたまらなく痛いだけ。今はないだろうが、以前は大分商に限らず名門・強豪にはこのけつバットがあつた。ほとんどの選手は一度は必ず経験しているのではなからうか。

試合はもちろんだが、練習も真剣勝負。そんな中でミスが重なるこのけつバットが待っている。毎日、練習をやっていると状況からしてこれがさく裂する時はわかってくる。賢い選手になると、少しでも「お手柔らかに」という感じで自分からすすんで尻を出してきたりするそうだ。

だが、指導者はむやみやたらと感情にまかせてたたいてきたわけではない。少なくとも松田監督は、みんながやった方がいいと思つた時しかなかったそうだ。「一人を救うか全体を救うかです」という。精神的には選手みんなの合意が必要なのだ。

技術的にはたたき方も難しい。熟練が必要だし、コツもある。尾てい骨には絶対に当たらないようにし、大腿（たい）部の後ろの肉のあるところを打つことが大切だそうだ。「大事な選手にけがをさせたら大変。そんなことになるくらいならたたかない方がいい」と振り返った。

もう一つはボールを投げつけること。かつてプロ野球の名門球団の外国人投手が判定に対する不満を爆発させて審判員にボールを投げつける事件があった。のちのちまで大問題となったが、高校野球の監督も練習中にボールを投げつけることがある。正確に言えば投げつけるまねをするのである。ボールを“置く”といったほうが正確かもしれないが、けつバットの時と同じで、ミスが重なるとそうなってくる。

両方とも大切なのは冷静さを失わないことだという。「心が冷静でないとけがをさせる。怒ったような顔をし、ボールが当たるような投げ方をして当たらないように投げなければならぬ。これはなかなか難しいことです」と松田監督。

けつバットを受けた人もボールを投げつけられた人もいう。「タイミングが抜群なんですよ。これはやられるなと思った時にやはりくる。自分の番まで待っている間に、梅干しを食べる時に口の中につばが出るのと同じで、尻がジンジンとうずいてくる。この時の気持ちはやられた者でなければわからないですよ。もう絶対にへまはしないぞと固く心に誓います」と、今となつては半ば懐かしそうに振り返った。

「たかがけつバット。されどけつバット」。気合を入れるにも師弟の固い“きずな”が大切だ。



昭和 30 年代半ばから伝わる三訓

36 野球部三訓

忘れられた “魂” 復活させる



大商野球部一塁側ベンチの奥にある「野球部三訓」。

「一、氣力に欠くるなかりしか
一、粘りに欠くるなかりしか
一、融和に欠くるなかりしか

人の道は 野球から学べ」

昭和30年代半ばから大分商野球部に伝わる訓示。練習が終わった後、主将に続いてナインは大きな声で唱和し、目標に向かって心を一つにする。

一、氣力に欠くるなかりしか。
一、粘りに欠くるなかりしか。
一、融和に欠くるなかりしか。

この野球部三訓をつくったのは橋本正義元監督（元大分商校長、元県高校野球連盟会長）。橋本さんは大分商から大分大経済学部に進み、大阪に就職していた。だが、関係者からの強い要請もあつて1年で会社を辞めて帰郷。1957（昭和32）年に母校の監督に就任した。5年間、必死になってチームづくりに打ち込んだが、甲子園には手が届かず大変に苦しい時代を送った。

橋本さんは、大分商（当時の校名は城崎）の選手として51年

夏、県大会、大分・宮崎・鹿児島3県で争われていた全国大会2次予選を相次いで勝ち抜き、見事に甲子園出場を果たした。あこがれの甲子園では下関西に1回戦で敗れたが、安打も放った。その後、一生懸命に勉強して大分大に入学。そして監督に就任した時、教職の免許は持っていなかったが、通信教育で1年半で取得した。

こんな自分自身の頑張りを振り返って、「気力・粘り・融和」の三訓は生まれた。『気力』というのは言い換えれば根性。今と違って甲子園に出場しようと思えば大分で勝つだけでなく、宮崎、鹿児島代表も倒さなければ夢はかなわない。ものすごい気力・根性があるわけですよ。たいへんなエネルギーを持つて事に当たらなければならぬ。簡単にくじけるような「根性なし」ではだめということをいっている」と橋本さんは説明した。

「粘り」については、「当時は甲子園が終わってから招待野球やなんやかやで秋になってもけっこう野球をやっていた。そんな中で大分商から『経済』に行こうと思えばなまはんかかとではだめ。そりゃあ、苦しかったが頑張った。毎朝、二ワトリが鳴くころまで勉強しよった。野球も一緒。粘って継続せんといかん。簡単に甲子園に行かれば、どこも苦労はしない。それほど甘くはない」と強調した。

最後の「融和」については、「あんまり大きな声じゃ言えんが、どうしても下級生をいじめるということがあったんじゃ。卒業してから『先輩』と声をかけてもらえんようじゃ、ちよつと寂しいわな。そういうことがないように、下級生をかわいがれと

いうことを説いた。これが一番の理由だが、広くいえば『D A I S H O』のユニホームの下に一つになって進めというチームワークをうたっている」と声を弾ませた。

橋本さんが三訓をつくったのは志半ばで監督を辞任する少し前。野球部の運営に調和と協調がなく、好成績も挙げられなかった時期。「四面楚歌（そか）の状態。何とかしたいという思いがあつたが、くたびれ果てていた。だから自分自身に対する戒めでもあつたと思うが、当時の選手にはかわいそうなことをした」という。橋本さんが辞任した後、この三訓も忘れられていたが、自分の筆で書いて昭和40年代に復活させたのが松田監督だった。

その後、選手から母校大分商の校長・県高校野球連盟会長へと橋本さんは上り詰めたが、高校野球に対する情熱、愛情は今も計り知れないものがある。「自分の時代と比べてみて、あまりにも今の子どもたちは恵まれすぎていて淡泊。一生懸命にやっているんだろうが、野球に限らずはい上がってくる迫力が感じられない。それに野球も教育。指導する方も常に教育的感覚で教えることが大切。究極の目的はやはり文武両道と思う」と力説した。

“松田野球”の中にはこの三訓や、さらに発展させた教えが随所に垣間見える。

「夢よもう一度」。92年3月、橋本さんは大分商の校長を最後に定年退職したが、再びの栄光を夢見て、大分商に松田監督を呼び戻すことに力を尽くした。その決断は5年後の春と夏、見事な花を咲かせ、平成初の大分商の甲子園出場に結びついた。

■オオイトデジタルブックとは

オオイトデジタルブックは、大分合同新聞社と学校法人別府大学が、大分の文化振興の一助となることを願って立ち上げたインターネット活用プロジェクト「NAN-NAN（なんなん）」の一環です。

NAN-NAN では、大分の文化と歴史を伝承していくうえで重要な、さまざまな文書や資料をデジタル化して公開します。そして、読者からの指摘・

追加情報を受けながら逐次、改訂して充実発展を図っていきたいと願っています。情報があれば、ぜひ NAN-NAN 事務局にお寄せください。

NAN-NAN では、この「闘将物語…松田瑞雄」以外にもデジタルブック等をホームページで公開しています。インターネットに接続のうえ下のボタンをクリックすると、ホームページが立ち上がります。まずは、クリック！！

大分合同新聞社



別 府 大 学

「闘将物語…松田瑞雄」 第六章●大分商への置き土産

著者 那賀 泰彦

初出掲載媒体 大分合同新聞夕刊（2002年9月21日～2004年9月4日）

《デジタル版》

2009年5月1日初版発行

編集 大分合同新聞社

制作 別府大学メディア教育・研究センター 地域連携部

発行 NAN-NAN 事務局

（〒870-8605 大分市府内町 3-9-15 大分合同新聞社 総合企画部内）

●デジタル版「闘将物語 松田瑞雄」について

「闘将物語 松田瑞雄」は、2002年9月21日から2004年9月4日までの2年間「私とスポーツ 闘将物語 松田瑞雄」として松田瑞雄元大分商業高校野球部監督を取材執筆、大分合同新聞夕刊に70回にわたり連載された記事です。これをデジタルブックに再構成しました。登場人物の年齢をはじめ文中の記述内容は当時のものです。

2009年2月20日

NAN-NAN 事務局